起業で輝く女性たち

強く、しなやかに〈下〉

塗装工業専務 川上冴華さん（32） 自己実現の場も構想中

盛岡市三ツ割3丁目にある川上塗装工業。1～2階吹き抜けの資材置き場と併設されたオフィス。昨春、中古で見つけた社屋は、周りに足場が組まれ、改装の真最中だ。オフィスの壁面は、同社が得意とする「アート塗装」で仕上げてある。

専務の川上冴華さん（32）は、夫で社長の秀郎さん（36）をはじめ、従業員7人を支える同社の屋台骨。妻であり、2歳の長女の母であり、若いスタッフにとっては姉のようでもある。秀郎さんは「俺はエンジンだけはでかい。でかいエンジンを動かす優秀なソフト」と妻の才能と働きぶりを頼りにする。夫婦二人三脚で歩んだ道は、山あり谷あり。冴華さんは「確かに大変。でも、自分で生きる道を切り開いている実感がある」と充実感を覚える。人生に確かな手応えを感じていた。

結婚8年目。秀郎さんが26歳のとき創業した会社はこの2月で丸10周年を迎える。

秀郎さんは15歳でマグロ漁船に乗ったつわもの。寄港地のスペインで勝手に船を降り、数カ月間、遊んでいたことも。1年足らずで日本に強制送還され、心ある社長に出会う。学校に通い直し、屋根板金や塗装の技術を身に付けた。

その後も職を転々としたが、交通事故で生死をさまよい「このままじゃいけない」と発奮。「みんなが幸せになれる家族のような会社を作る」と決意し、アパートの一室で、塗装業を始めた。

このとき創業資金を応援したのが冴華さんだ。海外留学してグラフィックデザイナーになる夢があり、コツコツと貯めた360万円があった。「60万円だけなら貸してもいい」。300万円は留学資金として残しておくつもりだった。

秀郎さんの志は大きかったが、仕事は簡単にうまくいくものではない。見るに見かねて、運転資金を助けているうち、貯金は底を付いた。冴華さんが外で働いたお金で、従業員の給与を穴埋め。夜な夜な秀郎さんのアパートに通いパソコン作業や経理も手伝った。

別れる選択もあった。「でも、何かビビッとくるものがあったんでしょうね」。破天荒だが、情に人一倍厚い秀郎さんを人生のパートナーに決めた。

転機となったのは、結婚3年目。「自分たちはものを知らなすぎる」。夫婦で中小企業家同友会に加入し経営の勉強を始めた。詳しく学んでみると、固定費がかかりすぎていて労務倒産寸前。社員とも徹底的に話し合い、雇用人数や給料を見直した。下請けから元請けに企業体質を改善するため、同業者と差別化できる経営の「しん」を作らなければいけないとも悟った。

講習会で「アート塗装」に出合ったのもこの頃。アート塗装は、プラスチック素材に絵画の要領で色を重ね、木や大理石のような質感を得るなど「むらなく均一に」という従来の塗装の概念を超えた独創的な手法だ。仕事が少ない冬場に内装工事で収入が得られれば、従業員の雇用を保障することにもつながる。地道な改革で経営は少しずつ好転。2013年6月、念願だった法人化にこぎ着けた。

目標は「地域に必要とされ、貢献できる企業」になること。板金や大工仕事が得意な従業員がいて、塗装とセットで対応できることが同社の売りだ。

オフィスの階には「コミュニティーカフェ」を作る計画も進めている。家庭の事情でフルタイムでは働けなかったり、店が持ちたくても持てない女性。こうした女性たちが「ワンデイシェフ」としてランチを提供したり、ハンドメードの教室を開いたりできる交流の場をと考えている。「女性の自己実現、生きがいを見つける場になってほしい。子育て中に不便を感じる環境も変えていきたい」と目を輝かせた。

（馬場恵）

「従業員は家族同然」。川上秀郎社長（手前左）と専務の川上冴華さん（右）。夫婦の絆が壁を越え続けるエネルギーだ